二〇二五年一月十日

三学期が始まった。八日（水）に始業式があり、今日は三日目である。今日から通常日課なので、六時間授業があり、シンジョーは少し疲れた。

一月になってから、あまり勉強も運動もしていなかった。給食はうれしかったが、一日学校にいるのは久しぶりだったので、疲れたのだろうと思う。

今日、疲れを感じた理由はまだある。まずは競書会。寒い体育館で行ったことと、音も立たないほどの緊張感の中で書いたことで、終わった後には力が抜けてしまうほどだった。

そして、疲れを感じたもう一つの理由が、漢字テストである。八日に担任から、一つの連絡があった。それは、十日に新年特別漢字テストを行うから勉強しておくようにというものである。その出題の範囲が変わっていた。元日から三日までの新聞記事から出すというのだ。習っていない漢字も出す。ただし、読みの問題だけだという。「新聞をとっていない人はどうするんですか」という質問が出た

が、ニュースを読むためならば、タブレットを使ってよいという答えだった。

シンジョーは、この日、帰ってから新聞を探したが、二日の分が見当たらなかった。母に聞いて知ったのだが、二日は新聞は休みだ。一月一日と一月三日の新聞を読めるようにしておけば、新年特別漢字テストは合格できることが分かった。「特別」という言葉が入っていたので、シンジョーは満点をとるために、二日間勉強してきた。新年最初のテストなので、トップの点数をとれば縁起もよい。いい年になる気もする。普段はあまり新聞を読まなかったが、テストに備えてよく読んだ。読めない漢字があれば調べたり、母に聞いたりして確認した。

テストには、次のような問題が出た。

鉄壁	突破口	憂鬱	高騰	緞帳	紡ぐ	親善	派閥	貫禄	肖像権	厄災	八冠	韓国	激励	闘志
浄瑠璃	堆肥	珠洲市	序盤	招集	呉服屋	抱負	応募	困窮	葛藤	旋風	要請	先駆者	賃金	最高峰
特捜部	就任													

勝訴　抗う　雇用　閣僚

匿名　融資　融和的　脅威

幹事長　高値　司令塔　邸宅

もちろん習った漢字もあったが、習っていない字も遠慮（えんりょ）なく出た。しかしシンジョーは、二日分の新聞を全部読み、読めなかった字についてはは読めるようにしておいたので、満点を取ることができた。

満点を取った者が三人いた。担任からは、「大人の漢字が読めた！あっぱれだ！」と、ほめてもらった。

この漢字テストがあったのは、四時間目。

六時間目の学級活動が、シンジョーにとっては疲れを感じさせる一番の時間になった。この時間には、「三学期のクラスのめあて」を話し合った。一人ひとりのめあては、始業式の日に書いた。校長先生からの宿題もこの日に書いて提出（ていしゅつ）していた。

○三学期のめあて

学習

全部のプリントを最後までやり切る

生活

どんなことでも最後までやり切る

○校長先生からの宿題

がんばって負けない大人になっている

クラスのめあて。話し合いでは、いろんな意見が出た。

・一人も取り残さないように学び合う

・毎日、良いことをする

・五年生の見本となる

・時刻を守る（下校、給食、授業）

・忘れ物をしない

・毎日全員と会話をする

・テスト直しはその日のうちにする

これまでのクラスの課題や、立派な最高学年として卒業していくためにクラスみんなで取り組んでいくことが並んだ。

これらの案に対して、いろんな意見が出た。

「忘れたらどうするのか」「守れなかったらどうするのか」「見本になるとは、どんなことをすればいいのか」「テスト直しで時間がかかったら、帰れなくなる」などなどであった。

シンジョーも発言した。

「良いことをするのは当たり前だと思います。悪いことをしない方が大事なことだと思う

ので、めあてにはふさわしくないと思います。どうですか。」

発言の最後に「どうですか」をつけるのは、クラスのきまりのようなものだ。司会が手を挙げた子を指名すると

「私もシンジョーさんの意見に賛成です。理由は、良いことをするよりも、自分たちのことをしっかりやる方が大事だと思うからです。」

と、その子が発言した。

近くの席の子同士で話したり、考えをノートに書いたりする時間の後、司会から次のような提案があった。

「私も、毎日全員と話すという意見に賛成です。できないかもしれないけど、がんばることがめあてだと思うので、やってみたいです。私も休み時間話したり、授業中学び合ったりする友達が限られていた気がします。残り三ヶ月、みんなともっと話したいと思うので、このめあてに賛成です。どうですか」

シンジョーは、司会の子の真剣な話を聞いて「やってみたい」と思った。そして、担任が授業中、座席表に何かチェックしている姿

を思い出した。シンジョーは手を挙げた。司会に指名されると、本日二度目の発言をした。

「賛成です。やってみたいです。先生が使っている座席表を使って、帰りの会に誰と話したのかを振り返ってみたらどうですか」

司会の真剣な訴えとシンジョーの意見に、自然と拍手が起こった。「賛成です」という声も複数人から上がった。

毎日全員と会話をすることが、三学期のめあてに決まった。

この日の帰りの会、さっそく担任が座席表をオクリンクで配信してくれた。「今日話をした子に〇をつけてみましょう」と担任から指示があった。シンジョーは、いや、クラスのほとんどの子は、驚かされた。一日一緒にいるはずなのに、半分も〇がつけられなかったのだ。「誰と話したか」「何を話したか」

「いつ話したか」、座席表にある友達の名前を見ながら、考え込んだ。漢字テストよりも頭を使った気がした。

「とてもよいめあてが決まったので、月曜日からは、意識して友達と話してもらいたいです。」

帰りの会の最後、日直が担任のような話をして、笑いを誘った。しかし、シンジョーは、笑えなかった。「あんまり話してないんだ」ということを思い知らされたからだ。

いつものように下校したシンジョーたちに、いつもとは一つ違うことがあった。それは、いつもとは違う子と話しながら歩いたこと。

「毎日全員と話すなんてできるのかな」とシンジョーはふと思った。その時、四年生の数人が歌う校歌が聞こえてきた。

がんばって　負けずに　勉強しよう

大好きな　大好きな　この学校で

「そうだ。がんばって負けない大人になるんだ。できるはずだ」

シンジョーも心の中で、四年生の子のように、歌った。

がんばって　負けずに　勉強しよう

大好きな　大好きな　この学校